

Appointment and Web-based Communication Division

2022年3月



—Vol.46—

連携室 だより

新年のご挨拶
病院機能評価受審の報告
インスリン治療継続表彰
血管造影装置DSAの機種交代
石灰化病変を削る「ロータブレード」
Da Vinciで行う消化器外科領域手術について
総合診療科（院内標榜）開設1年を振り返って
旭川赤十字病院 ホットラインのお知らせ
総合診療科のご案内

人事消息



令和4年1月1日付
脳神経外科
にしむら あたる
西村 中

新任医師



令和4年1月1日付
病理診断科
はやし まなみ
林 真奈実

新任医師



令和4年3月1日付
整形外科
ふじさわ たくま
藤澤 拓真

新任医師

退職者

令和3年12月31日
外科副部長
高橋 徹

令和4年2月28日
整形外科
村住 拓哉

理念

赤十字の基本理念に基づき、個人の尊厳および権利を尊重し
質の高い医療を提供します

基本方針

1. 患者さまの人権と意思を尊重した病院環境をつくります
2. 急性期医療を中心にして診療を進めます
3. 救急医療の充実に努めます
4. 地域の医療機関等との連携を推進します
5. 国内外の災害時の医療救護活動に貢献します
6. 職員の教育、研修を充実させます
7. 健全経営に留意して、その結果を社会に還元します

私たちは患者さまの権利を尊重します

適切に医療を
受ける権利

医療に関して
知る権利

医療行為を
自分で選ぶ権利

プライバシーを
保障される権利

人権を尊重
される権利

セカンド
オピニオンを
受ける権利

旭川赤十字病院職員行動規範 5つの約束

1. 私たちは、来院される方と職員に笑顔であいさつをします
2. 私たちは、初対面の患者さまに、自己紹介をします
3. 私たちは、電話の最初に、部署と名前を名乗ります
4. 私たちは、患者さまに診察や説明をしたあとに「何かわからないことやご質問はありませんか?」とお尋ねします
5. 私たちは、院内で迷われている皆様にお声掛けをし、ご案内します

編集後記

上川管内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されてから、この2月で2年になりました。ウイルスは変異を繰り返し、本稿執筆時点においては、デルタ株より感染力の強いオミクロン株が猛威を振るう第6波が続いております。今後も当院は、日々できる感染対策を確実に実施し、より一層気を引き締めてまいります。

発行

旭川赤十字病院 地域医療連携室

〒070-8530 北海道旭川市曙1条1丁目1番1号

tel.(0166)22-8111(代表) fax.(0166)22-8287(直通)

URL <http://www.asahikawa.jrc.or.jp/> Email renkei@asahikawa.jrc.or.jp

2022年は連携を一層強化する年です



旭川赤十字病院
院長 牧野 憲一

2022年の新年もコロナと共に始まりました。私は年末に少人数ではありますが仲間と飲む機会もありました。しかし、今年に入ってから急速なオミクロン株の拡大で今はそれも許されない状況になっています。コロナのおかげで、日本中が疲弊しています。我々も疲弊しています。早くウィズコロナであっても、正常な社会生活が営めるようになってほしいものです。

今年は診療報酬改定があります。2024年の改定が診療報酬と介護報酬の同時改定となることに加えて、第8次医療計画が始まる年であることから制度を大きく変える大改定となることが予測される中、今回の改定はそれに向けての方向性を示すものとなります。今回の改定で大きな目玉になるのが病院における外来機能の明確化です。「かかりつけ医機能に重点を置く外来」と、「医療資源を重点的に活用する外来」に分けられます。何れの機能を持つかを各医療機関が明確にすることが求められます。そして重要な事はこれらの機能をもった医療機関が連携をとることです。この連携については地域におけるそれぞれの取り組みと位置づけられていたことから地域ごとに大きな差があることが指摘されました。そして今後の方向性としてそれを是正していくことが明確に示されました。2年後の診療報酬改定ではよりはっきりとした施策が示されるものと思います。

旭川赤十字病院は高度急性期病院として医療資源を重点的に活用する外来を有する医療機関の立場を

取って来ました。今後も同様です。地域の基幹病院としてかかりつけ医制度を地域に拡げるために入院時にはかかりつけ医が誰かを確認し、その医師には入院したこと、退院したこと、退院サマリーを提供することを続けてきました。この地域におけるかかりつけ医の理解と啓蒙に少しは貢献できているのではないかと考えています。また、たいせつ安心医療ネットを介して診療情報も見ていただける仕組みを構築しています。今後は、一人の患者さんを地域で診ていくことが今まで以上に求められます。連携を強化するために情報提供に留まることなく地域の医療従事者の顔の見える関係を築いていきたいと考えています。

旭川赤十字病院は今年専門的な診療を強化すべく、Da Vinciの運用を開始します。血管造影装置も最新式の機種に入れ替えました。また、AI診断にもいち早く取り組み、AIによる胸部単純X線写真の読影も開始します。安心・安全な高度医療を追求していきます。

今年も旭川赤十字病院を宜しく願いいたします。

病院機能評価受審の報告



旭川赤十字病院
副院長 長谷部 千登美

2021年9月に、コロナ禍のため予定よりも1年ほど延期されていた、病院機能評価の訪問審査を受審しました。病院機能評価とは、病院組織全体の運営管理および提供される医療について、安全で安心な医療提供ができているかどうかを評価するツールであり、病院組織が継続して質改善活動に取り組み、医療の質向上が図られることを支援するものです。評価対象となる領域は、「患者中心の医療の推進」と「良質な医療の実践」、そして「理念達成に向けた組織運営」に分かれていますが、地域連携に関してもさまざまな視点から審査を受けます。今回は地域医療連携室を中心とした連携体制に関して、高い評価をいただくことができたので、連携医療機関の皆さんにご報告したいと思います。

地域連携に関連する審査対象項目として、「必要な情報を地域等へわかりやすく発信している」という項目があります。患者向け広報誌「クロス・レター」の発行や、病院ホームページに各種の病院データやクリニカルインディケーターを詳細に公開しているという点で、高い評価をいただきました。次に「地域の医療機能・医療ニーズを把握し、他の医療関連施設等と適切に連携している」という項目に関しては、「連携室だより」の発行やスタッフによる病院訪問、「連携の集い」に関して高評価で、さらに「たいせつ安心医療ネット」運営の中核となっている点・遠隔画像診断システムや脳卒中ホットラインの運用なども高評価の要因となりました。さらに、「地域に向けて医療

に関する教育・啓発活動を行っている」という審査項目では、市民公開講座、がんサロンでのミニ講座、そして年間133回に及ぶ出前講座が行われている点、介護施設向けのBLS研修やICLSコースの研修会などが評価の対象となりました。

これらの地域連携に関連する項目の審査では、すべてS評価(秀でている)をいただくことができました。これは、日頃当院と良好な連携体制を維持していただいている連携医療機関の皆さんのご協力がなければ得られなかったはずの結果で、連携施設の皆様には心から感謝申し上げます。

検討を要するというご指摘を受けたのは、病棟などにおける責任者の表示・感染性廃棄物容器の配置・同意書における同席者のサイン不足などいくつかありましたが、いずれも容易に改善させる項目ばかりでした。現在これらの指摘事項の改善を進め、医療の質向上を図るべく、活動を継続しています。これらの審査結果報告書の詳細は、当院ホームページから閲覧できるようになっていますので、連携施設の皆様には、お時間の余裕がある時にでもご覧いただければと思います。

地域連携に関連する活動に関しては、今回高い評価をいただけたことに慢心することなく、これからもさらに皆様のお役に立てるよう、地域全体の医療の質向上に少しでも寄与できるよう、病院をあげて努力を続けていきたいと考えています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



インスリン発見100周年特別企画 インスリン治療継続表彰

糖尿病・内分泌内科部長 安孫子 亜津子

糖尿病治療薬で最も歴史の古いインスリンは、1921年にカナダのトロントでバンティング先生と学生のベストによって発見され、2021年はインスリン100周年の年であった。インスリン発見前は、1型糖尿病は死の病であった。発見の翌年には牛から抽出されたインスリンが14歳の少年に投与され、血糖値の低下が認められ、この世紀の発見に対して1923年にはバンティング先生はノーベル賞を受賞した。その後1977年には遺伝子組み換え技術によるヒトインスリンの作成が成功し、1983年に製剤化された。1990年代以降はアナログ製剤が登場し、より生理的なインスリン補充が可能となり、現在ではたくさんのインスリン製剤を個々の病態や生活に合わせて選択可能となっている。

当院糖尿病・内分泌内科にはインスリン治療を長年行っている患者さんが多く通院されており、このインスリン発見100周年を記念して、10年以上継続してインスリン治療を行っている患者さんを表彰することにした。表彰の企画をポスターで待合に公開し、外来で主治医やスタッフが声をかけて、対象患者さんをリストアップした。その結果、220名以上が10年以上治療を継続していることがわかり、その中には30年以上が25名、40年以上が8名であることも明らかになった。表彰状は写真(右)のように作成し、受賞者の氏名は、現在当院の初期研修医1年目で、書道の師範でもある松永渉医師に美しい毛筆で手書きしていただいた。さらに栄養課から入れ歯洗浄機やパルスシート、携帯消毒

用アルコールなどを寄贈していただき、プレゼントとして渡した。写真(上)はこれまでに表彰した方々の一部で、写真撮影を承諾してくれた患者さんと主治医との記念撮影であり、皆照れながらも素敵な笑顔を見せてくれた。

インスリン治療をしていると、糖尿病であることを周囲に隠したり、生活や仕事に支障があるなど、つらい思いをすることが多々あると聞いている。特に30年以上インスリンを使用している患者さんは、インスリン製剤進化の歴史を身をもって体験しており、その努力は尊敬に値するものである。この表彰をきっかけに、インスリン治療の重要性を再認識していただき、今後の治療を前向きに続けてもらいたいと切に願っている。「100年前のインスリンの発見と、全世界のインスリン使用患者さん達に敬意をこめて」



表彰状の氏名を書く 松永渉医師

血管撮影装置:DSAの機種交代

脳神経外科部長 和田 始

当院の2台あるうちの頭部、腹部、四肢末梢用の脳血管撮影装置は2008年に導入され、年間500～600件の検査をこなしてきました。今回入れ替えとなり、令和3年12月7日から稼働を始めました。Philips社製Azurion7 B20/15と言う機器で、前世代は初めてデジタルフラットパネルとなった機種でしたが、今回は治療専用機となり、すべてにわたって性能が向上しています。血管撮影が診断装置であった時代から移行し、より多くの科にとって低侵襲治療に必要なプラットフォームになった感があります。

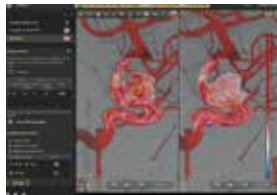
特筆すべきは、出来上がった画像、透視画像を見てもえれば分かります。デジタルデータの処理ビット数が一段あがり、今までは「細い血管が見える」程度でしたが、新しい機器では「脳組織そのものの還流が実感できる」レベルです。

低X線線量での高品質画像ClarityIQテクノロジーは、あらゆる場面においても高品質の画像を提供し、低X線線量レベルで優れた視認性を実現します。また、操作性に関しても治療用の高精細58インチパネルは巨大ですが、まるでスマートフォンを操作する感覚で、手前の液晶をスワイプすると、撮影した精細な巨大な画像を提示する事ができます(下図)。

新しい脳動脈瘤治療法であるフローダイバーター留置に伴う脳動脈の血流ベクトルを可視化するアプリケーション。脳血流還流画像を測定表示するアプリケーション、腹部治療に有用な3Dイメージガイドアプリケーション



血管撮影室全体像



治療前後の瘤内の血流を比較し、治療効果を判定できるアプリケーション



術者手元のコントロールパネル

石灰化病変を削る「ロータブレーター」

循環器内科部長 飛澤 利之

当院において2020年11月に認可が下り、新規導入され、使用可能となったロータブレーターという医療機器についてご紹介させていただきます。

ロータブレーターは、図のような形状をした、硬い病変を切削するダイヤモンドを塗布したドリルです。

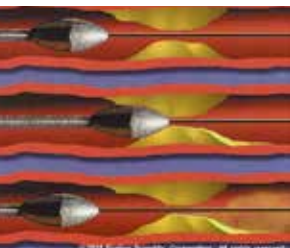
心臓自体を栄養する血管(冠動脈)は、糖尿病や高血圧症、高コレステロール血症などが原因で、血管壁にプラークが沈着・堆積することで動脈硬化を引き起こし、さらには石のように固くなる石灰化病変となり、狭小化し閉塞していきます。これが狭心症や心筋梗塞といった、虚血性心疾患の発症機序です。このように石のように固くなった石灰化病変は、柔らかい風船で拡張しようとしても十分に広げることが出来ず、ステントを留置してもきれいな仕上がりが得られないことがあります。

そこで、治療困難な石灰化のある動脈硬化病変に対し、有効な治療法的手段として、このロータブレーターが用いられます。ラグビーボールのような形状のドリルの先端にダイヤモンドの粒子が塗布しており、このドリルが高速回転することで石のように固くなった石灰化病変を切削し、血管を広げ治療していきます。

この治療を行うにあたり、どの施設でも誰でもロータブレーターを行えるわけではありません。専門的かつ高度な臨床診断能力並びに医療技術が必要であり、豊富な

臨床経験を有し専門的訓練課程を修了した、正式な認定を受けた循環器専門医並びに循環器専門施設に限られています。

しかしながら、このような治療は我々だけで完遂できるものでなく、周辺医療機関の先生方との密接な連携が不可欠であると強く認識しております。我々と切磋琢磨して急性期診療に携わる先生方、慢性期患者の機能回復など後方支援をして下さる病棟の先生方、ホームドクターとして地域に浸透した外来診療をされる実地医家の先生方のご協力なしには成立するものではなく、諸先生方との連携、協力関係をより強固なものとしたいと願っております。地域の先生方に信頼して頂ける医療を提供できるよう、開かれた、そして顔の見える医療を目指して参りますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



石灰化病変を削る「ロータブレーター」

Da Vinciで行う消化器外科領域手術について

外科 山本 和幸

この度、当院にて、手術支援ロボットDa Vinci Xiが導入されることとなり、そのご紹介を前回の第45号でさせて頂きました。2022年3月よりロボット手術を開始するため、医師、看護師、臨床工学士が所定のトレーニングを開始、企業が発行するcertificateを取得、他施設での手術見学を実施し、安全に導入できるようスタッフ一同尽力しています。

Da Vinciの利点は一般的に以下の通りとなります。

- ・高度な関節機能(手よりも自由度の高い動きが可能)
- ・手の動きを縮小する機能(縮小比率を設定することにより術者の実際の動きよりも微細に動く)
- ・手振れ防止(より繊細な操作が可能)
- ・3D画像(鮮明な画像より微細解剖の把握が可能)

本稿では当科で導入予定の消化器外科領域のロボット手術、特に**胃癌、直腸癌手術について術者の視点から具体的な教科書には書いていないようなロボット手術の利点**を解説させていただきます。

【胃癌ロボット手術の利点】高度リンパ節転移症例に対する根治性の向上、合併症の軽減

高度進行胃癌では転移リンパ節が動脈周囲の神経に浸潤していたり、隣に接している、浸潤しているケースがあります。従来の腹腔鏡手術では直線鉗子での操作となり、剥離ラインへのテンションが十分にかけられずに開腹移行となるケースが少数ですが存在します。ロボット手術の関節機能により開腹手術と同等、もしくはそれ以上に、剥離ラインにテンションをかけることが可能となり、他の拡大視効果等もあわせ、**開腹手術を凌駕できる**と感じています。また隣周囲のリンパ節郭清において、従来の腹腔鏡手術では隣を圧排することが必要でしたが、ロボットの関節機能を用いることで、基本的には隣に触らずにリンパ節を切除することが可能です。結果として術後の隣液漏が減少するエビデンスも示されています。

【直腸癌ロボット手術の利点】根治性の向上、骨盤内臓神経の温存、出血量の減少

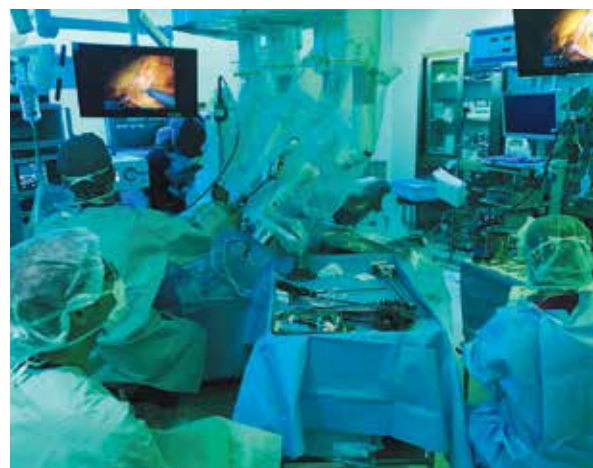
腹膜翻転部から肛門側の下部直腸及び直腸間膜の剥離において、特に男性、狭骨盤の方は剥離ラインの同定が難しいケースがあります。ロボット手術の関節機能により剥離ラインが明瞭となり①出血量の軽減 ②根治性の向上 ③QOLの向上(残さなければならない骨盤内臓神経を確実に温存することで、術後の排尿障害を予防できる)が期待されます。

当科では以上のようなロボット手術の利点を最大限に活用し、胃癌、大腸癌等の**外科手術の大多数をロボット手術で行い、良好な手術成績をだしていく決意です。**

ロボット支援手術を希望される患者様がいらっしゃいましたら、ぜひとも当院へご紹介をお願い申し上げます。



当院に搬入されたDa Vinci XiとDa Vinci Xiに連動した専用の手術台



手稲溪仁会病院でのロボット直腸癌手術の見学

総合診療科(院内標榜)開設1年を振り返って

総合診療科部長 山崎 弘資

総合診療科は昨年1月の開設以来1年が経過いたしました。患者紹介頂きました医療機関各位に厚く御礼申し上げます。

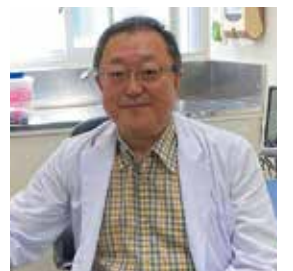
この1年を振り返ってみますと、開設からゴールデンウィークまでは、順調に患者数、稼働額とも増加傾向を示しましたが、それ以降は新型コロナ感染の第4波および第5波の影響もあってか低空飛行が続いているのが現状です。これまで以上の患者紹介をお願いいたしたく存じます。

当科はご案内のように、従来当院で対応しきれなかった分野に対応する新たなgatewayとして、当院専門診療科の隙間を埋める、敷居の低い紹介窓口というコンセプトで運営しております。そのため当科には疼痛(身体諸部位)、倦怠感、発熱、しびれ、むくみ、めまい、体重減少、リンパ節腫脹等、多種多様で複合的な愁訴を持った患者が受診されております。呼吸器症状、消化器症状など特定の臓器症状を呈する患者は直接専門診療科に紹介されるためと思われます。その結果、種々の内科疾患(循環器、呼吸器、消化器、脳神経、代謝・内分泌、血液、腎臓、膠原病、感染症等すべての領域)、一般外科疾患、整形外科疾患、脳外科疾患、耳鼻咽

喉科疾患、皮膚科疾患、泌尿器科疾患、精神科疾患などの、専門診療科が担当する諸疾患の初期対応に関わってきたこととなります。その中には、診断に非常に難渋した症例、症例報告ものの珍しい症例もあり、多くの症例を経験させていただきました。

私はこれまで、ジェネラリストとしてではなくスペシャリストとして医療人生を歩んできたこともあり、総合診療科がカバーする領域の広さを改めて実感するとともに、診断がメインの外来診療が私の能力の限界と感じております。当科は現在、外来診療のみ行っておりますが、将来入院診療も担っていく場合には、診断的治療、marginalな領域の診断・治療、複合病態の診断・治療を行なえる、総合内科的陣容を擁するチーム構成が必要になるのではないかと考えております。

今後も皆様の御指導、御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



旭川赤十字病院 総合診療科のご案内



何科に紹介したら良いかわからない…

総合的に診てほしい…

【予約に関するお問い合わせ先】
〒070-8530 北海道旭川市曙1条1丁目1番1号
旭川赤十字病院地域医療連携室 電話0166-22-8111(代表)

受付曜日 月曜日～金曜日(祝休日を除く) 受付時間 8時30分～15時00分